



後列左から 吉田一茂さん、飯塚紘子さん、宿久洋教授
前列左から 岡部格明さん、東海林岳寛さん、酒井俊樹さん

トピックス
おめでとう！ やったね！

DXイノベーションチャレンジ2021

同志社大学生とUAC

合同チームが準優勝！



文化情報学部・研究科の学生達のDXイノベーションチャレンジ（以下「イノチャレ」）での成果は、校友と大学教授の東京オフィスでの出会いが始まりでした。

イノチャレは、デジタル社会を牽引できる人材の育成を目的とする実践プロジェクトで、育成セミナーからビジネス企画コンテスト決勝審査まで約半年かけます。同志社大学の学生3名と、株式会社ユビキタスAIコーポレーション（以下UAC）のチームが「データを基にしたジョブ型の働き方」を提案し見事準優勝／IPA審査員特別賞に輝きました。（詳細はイノベーションチャレンジで検索してください。
<https://innovation-challenge.biz/>）

学生と企業人をつなぐ

チームの結成はイノチャレ審査委員の小西一有さん（88年・工学部工業化学科卒）がUACの長

谷川社長と文化情報学部の宿久教授をつないだことで実現しました。宿久教授の同志社講座（東京オフィス）を小西さんが受講されて以来交流されてきました。

宿久教授は「学生に企業の方々のコラボができるいい機会をいただき感謝しています。データとAI活用がジョブ型雇用社会への変換につながることを期待しています」とコメント。

UACからは、プログラマーを経て現在はディレクター（企画室主任研究員）の吉田さんと事業部長の飯塚さんが参加、チームを牽引してくださいました。リモートワークでのメンバー管理が日常という飯塚部長は「データによる業務評価、可視化は重要になっています。今回のプロジェクトはIT業界の将来的な採用面でも意義のあるものでした」と総括。

吉田一茂さんは「外資系企業のプログラマーはすでにジョブ型です。成果の評価をAIとデータの組み合わせで定量化することを目指しました。オンラインで打合せを重ねましたが、学生さん達からは毎回着実にアウトプットがあり会社のプロジェクトみたいで楽しかったです」とのこと。学生の感想も聞きました。

岡部格明さん（博士課程1年）
「評価がされない同一賃金のアルバイトでの不満をテーマ設定の入り口にしました。発表までの活動でマネジメントを多く学ぶ機会となりました」

酒井俊樹さん（4年次生）

「社会人の方とのプロジェクトは初めて。学ぶことはかりでした。特に、コンペに出ていくまでのアイデア出しは新鮮な経験でした」
東海林岳寛さん（4年次生）

「働いておられるお二人からはとても刺激を受けました。面白いので消そうとした発想を広げていく時などは特に、手法の多さに感動しました」

*年次は取材時のものです。

本件は、東京オフィスが東京の校友と大学をつなぐHUBとして機能した好事例となりました。

文責／安永昌代（81年・経）

小西一有さん から一言



DXは、データ解析により社会的な構造変化を目指します。そこで、統計・解析が専門の学生の出場した例はありますが、統計・解析やAIが専門の学生の参加ははじめてです。学生さん達が初出場で見事に準優勝に輝き企画委員としても大学OBとしても誇らしい気持ちです。

（イノチャレ企画・審査委員／合同会社タツチコア代表／同志社大学大学院嘱託講師）